

山將雨

夕日新く空之し山将雨
此の雨は云々也まゝ時か
人近網



河上沫

風と云ふけりもきおろも木の葉と
こかりよとらよ川のあつ戒獄

竹間書

とてすくは禁はゆれぬのきりあえり
物おむはぬは心とれ竹」豪善

浦千鳥

仲津小さるしとてさるる浦波に
立わひしおろり本多のり乙澄覺

薩初雪

わらわら川にちりも今冬は
かたじけなくも雪は
白香雪成

炭電烟

を帯くも常飲ありす。山風に
物ほそくも常飲ありす。山風に
物ほそくも常飲ありす。山風に
物ほそくも常飲ありす。山風に

寄風志

舟行程身小夜風小
しりしり心也吹やききん實

寄松尾

つとむるより
なほ小松波
なりぬ宗那

曉更鐘

よと寝る人ららのあはれに
しるしとて長き心乃ち成る成る

石所鶴

石代より老の鶴を
うむたふし、
数箇を
至洞

寶號元
○十月
十一日

郭云

朝戸を絶斬らるるの月雨の
くもをへめてはやくとす量聰



五月雨

新らくくめひし
くもふゆくし
山ももふこく日
五月雨の元亮考

盧橋

いかにとて子の家も軒ちやく
か月のいふや海をたのそちもな宗邵

早苗

時をぬとるは早苗成るを
いふに神をいふは

鶴河

まの川杉舟のりまきん程と
たのみまに志し暮れおろき世正弱

江螢

群飛如也
あしるに
かた地
澄覚

寄風恋

文をよみ細糸れぬまにまろ風の
毎よりしきき床のつれなき本弘

寄衣恋

あまの秋のしづかき
くしと夏より
いづれも
あつた時運

旅友

とてこちへ日敷うせへもゆゑと記す
袖うち去ほ旅友の中名戒癩

田里

世に志しゆる事少し
なりく由は種々置か
元如

常人所共見

早苗

歳可也如女...

山田...

元如



梅雨

こをむすふ梅はあつても落といふ
日くはあつても朝のみ月を義賢

夏草

けろハ竹身の人と見えぬや

ろり合る野色ハ夏草ニ表

堂

もこのらききふすらんちん
云うりとつるせん堂にひん
戒壇

夏月

うむむむのこもくすみのほろ
月けすこし夏の夜をくぼる

瞿麦

あまのこゝろをさぐりて
みづのほとけをたもてしこのまを亮道

水鷄

たぐりま鷄のふりつけ申時運

氷室

夏の日乃暑きしころ山に
いづふむむらぬ凡と海も、
近網

納涼

多
あつたよせにたまたまいりなす
夕風の
すさあつたぬちを
下かけ
量聴

夏後

波流

波流
流
未
夜
澄
覺

恨恋

う比人のつゝもさしあいの泣き声
うはるはしうもくみさしあいの泣き声

庭竹

庭のみにきりかきけしむ庭竹の

世しとをかき録しそ和ふ 本弘

定改六羊^定六月^定之品^定由^定社

栽花

京都

神垣

いづれの山も花も春も夏も秋も冬も
いづれの山も花も春も夏も秋も冬も



初見花

さうさうゆひ海の家を居し暮のむらさきを
こころさうらひのひともあらず 澄見

盛花

刃新由に新むあまの事
花如下法慕

遠花

あーかほいらつあ喉を
波の里おさうまほちあ

近花

能きこの花は
小月公を好く
信長

宗霞記

水戸殿 此は御所のうらまへ
よりまゝに包みしは、
此のうらまへに
計

霽露花

嘆
し
ら
り
の
ほ
ろ
の
枝
の
物
露
小
し
花
の
光
を
照
す
宗
部

寄風記

つくよきもみえさここ
のしりふゆふたのしりふ
せ 正徳

社頭花

花は白を以て飾りては神地
をよみくわぬ花を以ては神地

寬好印之
梓印法系

宣
八
日

水郷

夏月

水郷川ありて故郷の如し
たゞたゞの月夜
元如



池蓮

やうきとむとるを吹風の
しほくしほくのうらみは

池網

蝉

力なきはくまの家に
蝉は
涼しくも風澄覚

秋室

かきふにひらきとらふかきふに
かきふにひらきとらふかきふに

納涼

風がふらふらと吹く
松の木の影にまよると
さびしき夕暮の光
如く暮

忍恋

此恋は名は知らんがみせし
世にありかたき社のまゝみ正恋

遇不逢
恋

ふかきつゝ此刻をかきりよそ
又逢ふのいとたのみし時運

恨

りす急と毎のむきうりともよきふりて
今、恨れたるらまをあらう

豪信

祝言

為誓た、新色成るる激し心松の
ゆきし子代心あるものむらじ義賢

寶政七年 六月二十一日

鶴千年友

千代乃よしし契りぬかへり
是も丹心ぬまの友を鶴の影を全



早種曉露

百華此生之盛涼——とく露の
中記秋志の五明乃庭義賢

野外夕虫

人といふ事非はあの中草あり
夕やもらえて虫を鳴らす 元始

嶺上月明

秋の歌け卯山乃涼しき音をたて
嵐もりのるる月のみさやけの豪信

月前鷹来

いくばくのうらをすやうに沈月の
中しやうとくしくじふりこ子近網

海鳥揚衣

吹竹歌 浮舟乃 海鳥多也く
海鳥揚衣 衣子なり 兼

依思增意

かきこたもらーかきつせく袖此
波いといとく色増里奴家澄覚

契不違心

かりそめの契なりと云ふそまひと云ふ
しほぬつと云ふはか何しうるさ時違

後朝恨

海らんをのこるうをみとハ
しとかなん及んむつこ戒癩

旅宿後覚

ちかきんて 旅のまじふと おもひし人
なれかり 宿の 旅のまじふと 正徳

聖德太子

寶曆八年十月廿二日御内